披裂部浮腫の評価法

阿部 晃治・秋月 裕則・幸田 純治*

増田 博範*・上枝 仁美*・小池 靖夫*

Quantitative Evaluation of Arytenoid Edema

Kouji Abe and Hironori Akizuki

(Kochi Nokyo General Hospital)

Junji Koda, Hironori Masuda, Hitomi Ueeda and Yasuo Koike

(The University of Tokushima School of Medicine)

Arytenoid edema is a critical clinical signs under any conditions. However, the severity of arytenoid edema is variable and this condition has therefore been very difficult to quantitate. The authors have attempted to quantitatively evaluate the status of edema in patients with abnormal sensations in the throat (AST) as well as in healthy subjects. The degree of arytenoid edema has been classified into five categories from level 0 to 4. According to this classification system, edema has been identified in more AST patients (69%) than in healthy subjects (30%), and the severity has been found to be greater among the AST patients. Based on the present results, the proposed classification system appears to incorporate parameters suitable for precisely classifying the presence and degree of edema with reasonable reliability. Thus, this system appears to be an effective tool for quantitatively evaluating arytenoid edema.

Key words : arytenoid edema, abnormal sensations in the throat

はじめに

披裂部の浮腫状変化は急性炎症やアレルギー反応、腫瘍性病変、放射線治療後などで認められるものであり、診察の際に確認しなければならない所見の一つである。この披裂部浮腫は咽喉頭異常感を訴える患者においてもよくみられる所見である。しかし、披裂部浮腫の程度の評価については、はっきりとした基準となるものはないため主観的な要素が入ることも否めず、また経過観察をしていく上での定量性にも欠けていると思われる。そこで我々は今回、清水ら¹⁾の提案による喉頭・下咽頭浮腫の分類を参考にし、咽喉頭異常感を訴える患者において定量的に披裂部の浮腫を評価することを試みたので報告する。

方 法

清水ら¹⁾により提案された喉頭・下咽頭の粘膜浮腫の分類は、喉頭癌、下咽頭癌の放射線治療による粘膜浮腫の程度、経時的変化を客観的に評価するために考案されたものであり、レベル1～5に分類されている。主に輪状後部の開存の有無、梨状陥凹の開存の有無を基準にしている。今回我々は、この評価法をもとに披裂部浮腫の分類を図1のように設定した。すなわち、レベル0は披裂部に浮腫を認めないもの、レベル1は披裂部に浮腫を認めるが、輪状後部は開存しているもの、レベル2は披裂部に浮腫を認め、輪状後部も閉塞しているもの、レベル3は浮腫により梨状陥凹が発声時には開存しているが、呼吸時には閉塞しているもの、レベル4は浮腫により梨

Level 0 : 披裂部に浮腫を認めない

Level 1 : 披裂部に浮腫を認めるが、
輪状後部は開存

Level 2 : 披裂部に浮腫を認め、
輪状後部は閉塞

Level 3 : 浮腫により梨状陥凹が
呼吸時閉塞、発声時開存

Level 4 : 浮腫により梨状陥凹が
呼吸時、発声時ともに閉塞

図1 披裂部浮腫の分類

状陥凹が呼吸時、発声時ともに閉塞しているもの、である。なお、浮腫レベルに左右差のある場合には、浮腫レベルの高い方を採択することとした。この浮腫分類を用い、下記の対象患者において披裂部浮腫の状態、そのレベルにつき検討した。浮腫レベルの判定は、ビデオテープに録画された喉頭ファイバースコープを複数の耳鼻咽喉科医が評価して行った。

対 象

対象は、咽喉頭異常感を主訴として外来受診した患者42名(男性12名、女性30名、年齢は22歳～78歳で平均年齢は55.8歳)、比較対照として咽喉頭に訴えない健常者30名(男性15名、女性15名、年齢は18歳～72歳で平均年齢は49.8歳)である。咽喉頭異常感を主訴としている患者の異常感の原因には、副鼻腔炎をはじめさまざまなものが見いだされたが、今回は披裂部の浮腫のみを検討項目とした。

結 果

今回の検討結果の内訳を図2に示す。咽喉頭異常感を主訴としている患者の浮腫レベル0は13人(31.0%)、浮腫レベル1は22人(52.3%)、浮腫レベル2は5人(11.9%)、浮腫レベル3は1人(2.4%)、浮腫レベル4は1人(2.4%)であった。これに対して咽喉頭に訴えない健常者では、浮腫レベル0は21人(70.0%)、浮腫レベル1は8人(26.7%)、浮腫レベル2は1人(3.3%)、浮腫レ

ベル3、4の症例は認めなかった。咽喉頭異常感のある症例では69%にレベル1以上の披裂部浮腫を認めた。その中でも浮腫レベル3の1例とレベル4の1例は、下咽頭、食道、喉頭の検査にて器質的疾患が認められず、血液検査にてアレルギー反応が認められたため、喉頭のアレルギー²⁾を疑った症例である。抗アレルギー剤の投与によって披裂部の浮腫は軽減し、これに伴い咽喉頭異常感も若干改善した。

考 察

今回、披裂部浮腫の状態を、その程度により0～4段階に分類し、咽喉頭異常感を主訴とする患者を対象に、客観的に評価することを試みた。その結果、咽喉頭に訴えない健常者に比べ、咽喉頭異常感症患者に披裂部浮腫を認める症例が多く認められた。また咽喉頭異常感症患者においてのみレベル3、4と高度の浮腫を認めた症例があり、喉頭アレルギーが疑われた。披裂部浮腫の軽減により咽喉頭異常感が改善したため、披裂部浮腫が咽喉頭異常感の要因の1つとなっている可能性も考えられる。しかし、今回の検討において健常者の中にも軽度であるが披裂部に浮腫が存在する症例を認めた。このような症例は器質的病変が存在する可能性があるため、定期的な経過観察が必要であると思われる。

披裂部浮腫を認めた患者において、経過観察をしたり治療の効果判定をする上で披裂部浮腫の状態の経時的変化を定量的に観察することは困難であったが³⁾、この評

図2 咽頭異常感を訴える患者，健常者における浮腫レベル

価法を使用することで客観的，半定量的な判断が出来ることから有用であると思われた。

ま と め

1：披裂部浮腫の程度をレベル0～4の5段階に分類した。

2：その分類を用い，咽頭異常感を訴える患者と正常者を対象に披裂部浮腫の程度につき検討した。

3：咽頭異常感を訴える患者では69%，健常者では30%に披裂部浮腫を認めた。

4：この分類を用いることにより披裂部浮腫の状態を定量的に評価することが可能であると思われた。

参考文献

- 1) 清水啓成，石戸谷淳一，伊丹 淳，他：喉頭・下咽頭の浮腫の評価法．日気食会報 **46**：1～6，1995.
- 2) 山下利幸，山口幹夫，武田直也，他：喉頭アレルギーの総合的研究．耳鼻 **41**：871～877，1995.
- 3) 小池靖夫，石谷保夫，中村克彦，他：咽頭異常感の数量化について．耳鼻臨床 補23：46～50，1988.

(別刷請求先：阿部晃治
〒783-8509 高知県南国市大埴甲1571
高知県農協総合病院耳鼻咽喉科)